



- ・7月14日は、宿泊先を出発し、オーレリウス・ジーカス駐日特命全権大使の推薦に基づき、ヴィリニウス市内の視察を行った。

1 (8) ヴィリニウス市内視察

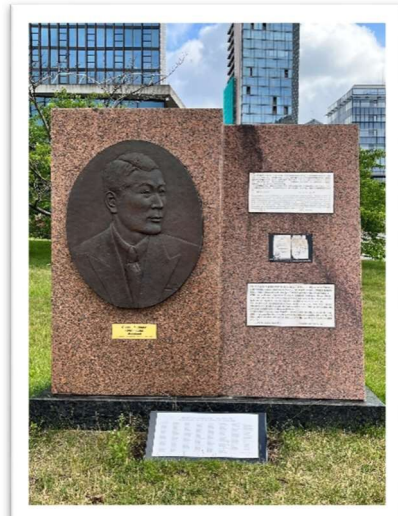
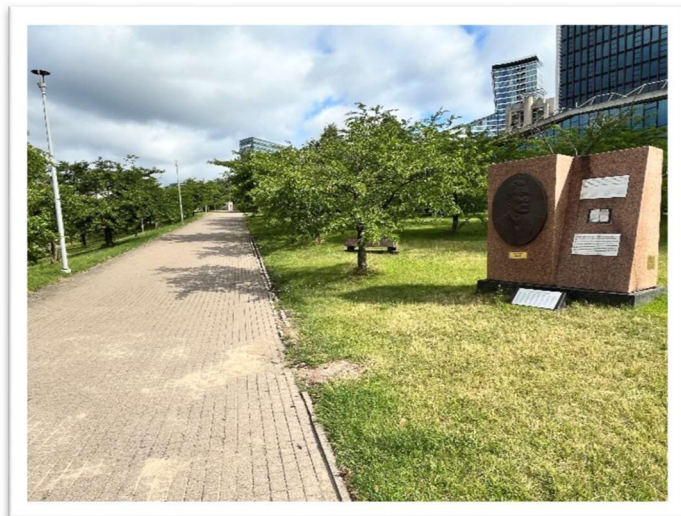
- ◆調査日：令和6年7月14日(日)
- ◆視察先：杉原記念桜公園、国会議事堂、王宮



7月14日は、オーレリウス・ジーカス駐日特命全権大使の推薦に基づき、ヴィリニウス市内の「杉原記念桜公園」、「国会議事堂」、「王宮」の現地調査を行った。

その概要は、以下のとおりである。

杉原記念桜公園



杉原記念桜公園は、杉原千畝氏の妻と当時のリトアニアのアダムクス大統領が2001年に桜を約200本植樹し、整備した公園である。4月の中旬から5月にかけて、桜が満開になる。公園には、杉原千畝氏の記念碑も建てられており、記念碑を建てたのは杉原千畝氏の母校である早稲田大学とのことであった。

杉原記念桜公園には、広島で被爆した敷石も設置されていた。敷石には、観音菩薩が彫られていて、祈りの石として、平和のため、被爆者を追悼するために設置されているとのことであった。平和であるようにと、多くの方が祈っているとのことである。



このほか、2011年の東日本大震災の後に植えられた桜の木もあるとのことであり、リトアニアの人々の平和への思いと、日本との絆を非常に感じられる公園となっていた。

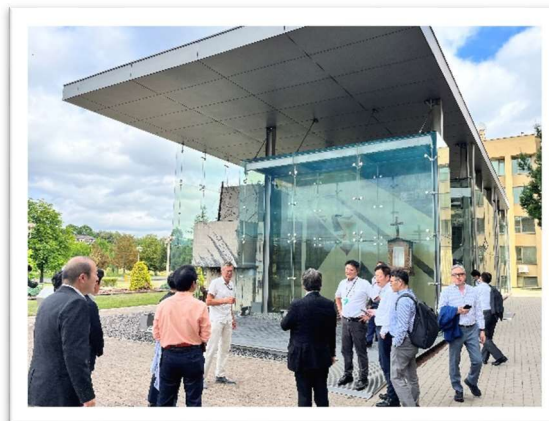
国会議事堂



ゲディミノ大通りの西端に建てられている、リトアニア共和国の国会議事堂である。1991年1月にソ連政府が送った武装部隊がヴィリニウスを襲撃した際、数万人の市民が議会を守るために集まり、非武装の抵抗を示している。

ソ連の襲撃の際には、テレビ塔やテレビ局、主な出版社も攻められて犠牲者が発生した。そのため、リトアニアの市民はできる限り早期に、国会議事堂を守るために集まり、バリケードを作り、自らの体を盾にして非暴力でソ連の攻撃を防いだという。

現在の国会議事堂には、西側の一角に当時のコンクリートバリケードや有刺鉄線が置かれており、リトアニアの人々の平和と自由・独立に対する強い思いを感じられる記念碑となっている。



王宮



代々のリトアニア大公が住んだ白亜の宮殿であり、リトアニア独立回復後の象徴的イベントとして、2002年から再建が始まり、2013年に博物館として公開されている。

敷地内では、イベントを開催できるスペースもあり、文化財を積極的に活用しようとする取り組みが感じられた。



- ・ヴィリニウス市内の視察を終え、リトアニア共和国におけるすべての調査は終了した。
- ・リトアニア共和国での調査を終えた視察団は、ヴィリニウス国際空港から出国し、約3時間のフライトを経て、2カ国目の訪問国であるフランス共和国のシャルル・ド・ゴール国際空港に到着した。
- ・入国手続きを終えた後、ランス市へ向かい、この日の調査は終了した。



- ・ 7 月 15 日は、宿泊先を出発し、まず、この日最初の調査先であるフジタチャペルへ向かった。

2 (1) フジタチャペル視察

◆調査日：令和 6 年 7 月 15 日 (月)

◆対応者：Dimitri OUDIN 氏 (ランス副市長 (国際化担当)) ほか



《調査目的・概要》

名古屋市とランス市の姉妹都市提携は、平成 25 年 6 月にランス市から画家・藤田嗣治氏をきっかけとした申し入れがあったことに始まる。その後、名古屋市美術館長と名古屋市会公式代表団がランス市を訪問し、「名古屋市美術館とランス美術館の友好提携に関する覚書」を締結するとともに、平成 28 年 4 月から 7 月にかけて、名古屋市美術館で「生誕 130 年記念 藤田嗣治展—東と西を結ぶ絵画—」を開催した。

平成 28 年 10 月には名古屋市会において、「将来的な姉妹都市提携に向け、名古屋市とフランス共和国ランス市との交流をさらに促進することを求める請願書」が採択され、平成 29 年 10 月に両市の姉妹都市提携に関する調印式が行われた。

日本人画家である藤田嗣治。その精神を直接表現した場所が、藤田氏の最晩年の傑作「フジタチャペル」である。藤田氏自らが建設に関わった礼拝堂であり、フランスの地方都市であるランス市にひっそりと佇んでいる。

藤田嗣治は、フランスで成功したエコール・ド・パリを代表する画家として知られており、名古屋市美術館においても、「自画像」、「夢」、「ベルギーの婦人」をはじめ、7 点の作品を所蔵している。

はじめに、ランス市の副市長である Dimitri OUDIN 氏より、ご挨拶をいただいた後、ランス美術館のガイドから説明を聴取しつつ、現地調査を行った。

その概要は、以下のとおりである。

<Dimitri OUDIN 氏>

私の名前は Dimitri OUDIN。国際化担当の副市長です。

今日は、姉妹都市協会の PADET 会長にも来ていただいています。

私たちも今年の2月に名古屋に行きましたが、また皆さんをお迎えできてうれしく思います。今日はほとんど1日同行します。大聖堂の見学の時は入り口までのご案内ですが、その時はガイドが同行します。

まずはこの1日の始まり、フジタチャペルから始めるというのはとても良いことだと思います。日本とのつながりはいろいろありますが、フジタチャペルはそのうちの一つとなります。

名古屋市との姉妹都市の始まりも美術館から始まった、藤田氏との関係で始まったため、一つの象徴と言えます。姉妹都市の前は、美術館、名古屋の美術館とランスの美術館の収蔵品の貸し出しから始まったわけです。

中にはガイドがいますのでこれから見学をしていただきます。

藤田嗣治氏の日本的な部分、そして西洋から影響を受けた部分も理解していただければと思っています。私たちの姉妹都市の友好関係を考えれば、ミックスしていくのが、影響を受け、混ぜるというのがとてもいいことだと思っています。

<ランス美術館ガイド>

フジタチャペルによろこそいらっしゃいました。まず簡単に、藤田嗣治とはどういう人だったのかご説明します。

1886年の東京生まれ。豊かな家族の出でしっかりした教育も受けて、東京の美術大学に入り、そして1913年にパリに来了。彼はパリのモンパルナス地区に



▲Dimitri OUDIN 氏



住んで、いろんな画家に、ピカソ、スーティンにも会っていきます。

彼はフランスに来てすぐに成功していきます。ものすごく勉強して、フランスの中でスターみたいになってくる。彼はそれを利用していきます。メディアを利用していくのです。前髪、そして丸い眼鏡。要するに自分のイメージを作っていく。自分で洋服も



作っていく。自分を見せるためにいろんなパーティーに行くわけです。ただしずっとそこにいるのではなくて、1時間、2時間、自分を見せて、出して。そして家に帰ってからまた一生懸命勉強したり、絵を書いたりしていた画家でした。そして彼は、その時の日本を代表する画家となっていくわけです。

しかし、藤田氏にとっては第二次大戦の難しい時代でした。彼は日本に帰国し、従軍画家として活動する。彼は戦争が終わってからフランスに帰りたと思いました。アーティストの方々も彼を応援していましたが、フランス人にとって、彼は敵。フランスに戻るのが難しい。そこでマッカーサーを訪ねて、まずアメリカへ、そしてフランスへと移る。そして、1955年にフランス国籍を取得します。

藤田氏の運命を決定づけたのは、ボトルの金属キャップのデザイン制作を藤田氏に依頼したシャンパンメゾン「mam」社の社長、ルネ・ラルーとの出会いであった。

熱心に藤田氏を支援したラルー夫妻は、藤田氏がカトリック改宗への思いを抱いていること、さらに洗礼を受けた折には礼拝堂装飾に携わりたいという藤田氏の夢を知り、全面的に協力していく。

その後、礼拝堂建設に適した場所を探し求めた藤田氏とラルー氏は、mam社のすぐ隣の敷地に建設を決定し、ラルー氏はその土地を自社の敷地として買い、藤田氏に創作の場を与えた。

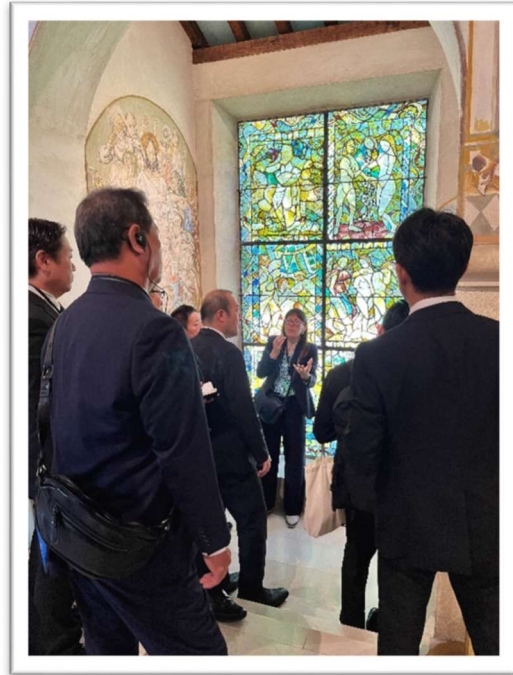


<ランス美術館ガイド>

藤田氏はチャペル、礼拝堂をつくりたいと考えました。南フランスの画家の友人も自分たちの礼拝堂をつくっており、完璧な礼拝堂をつくっていかないといけないと思いました。そして、彼はこの建物をデザインし、もちろん中のフレスコも描きました。この礼拝堂のフレスコには、自分の人生のまとめのような、自分の人生で得た知識、自分の人生で印象を受けたもの、人生のまとめがここに絵として表れているわけです。

このチャペルを考えたとき、彼は80歳で病気をもっていました。自分で、一人で全部、中は3か月で全部仕上げました。最後の一息で、亡くなる前に。

彼はフレスコの技術を使いました。石灰の上に色を入れていくのです。石灰が色素を吸収していきます。つまり、石の上に描いたのではなく、絵の具が石灰に吸収されて中に入っている。ということは早く仕上げないといけない。すぐ乾く。間違えることはできない。油絵と違って後で直すことはできない。間違えたときは全部壊してやり直す。また石灰層を塗って書き直す。フレスコは2～3時間で乾いて終わり。手直しはできません。



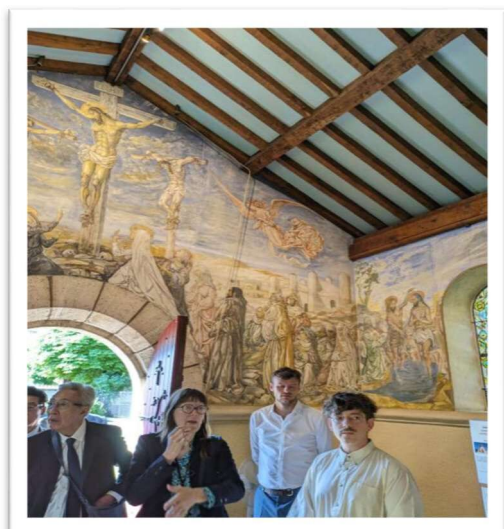
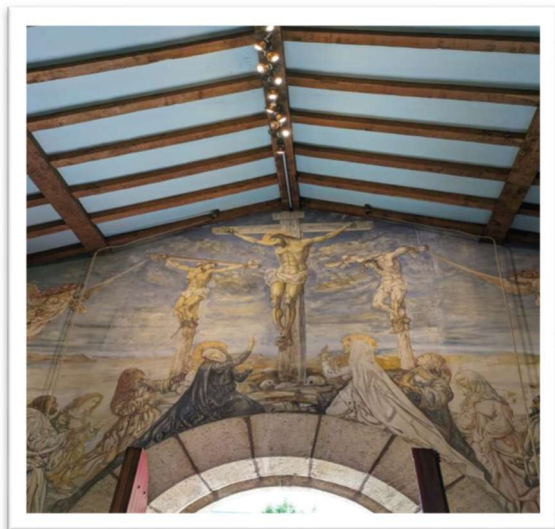
藤田氏は自身の希望の礼拝堂ができるよう、設計の段階から徹底して携わり、内部の装飾はフレスコ画の特性上、わずか90日間という驚異的な速さで描き上げた。

1959年10月14日、藤田氏は君代夫人とともにランスのノートルダム大聖堂でカトリックの洗礼を受けた。藤田氏の洗礼名はレオナール。君代夫人の洗礼名はマリー・アンジュ。洗礼式はメディアで大々的に報じられた。洗礼を記念して藤田氏は聖母子像を描き、ランス司教に捧げた。さらにランス美術館に寄贈しました。

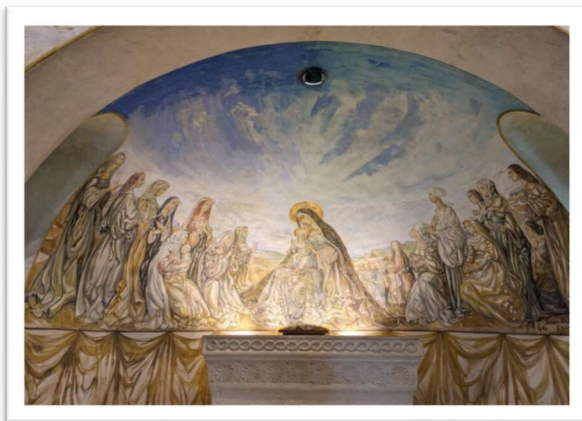


現地調査では、フジタチャペルの内部のフレスコ画についても詳細な説明を聴取した。その概要は以下のとおりである。

礼拝堂の入口扉をくぐった先で入口背面に描かれているのは、ゴルゴタの丘で刑に処されるキリスト像である。その様子をひざまずいて見つめる藤田氏とラルー氏も、右端に描かれている。



主祭壇となる正面奥の壁には、幼いキリストを膝に抱える聖母像が描かれ、キリストの刑像という男性的な主題と対照的に、聖母の周囲には多くの修道女が従えられており、柔らかみのある丸い壁の形状もあり、女性的な場面になるよう意識して描かれたと見られる。このように礼拝堂全体に言われているのは、憎悪と愛情など、左右対照になっていることだった。

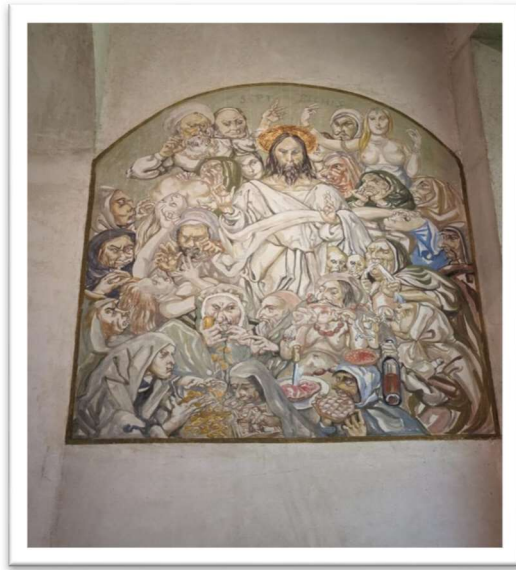
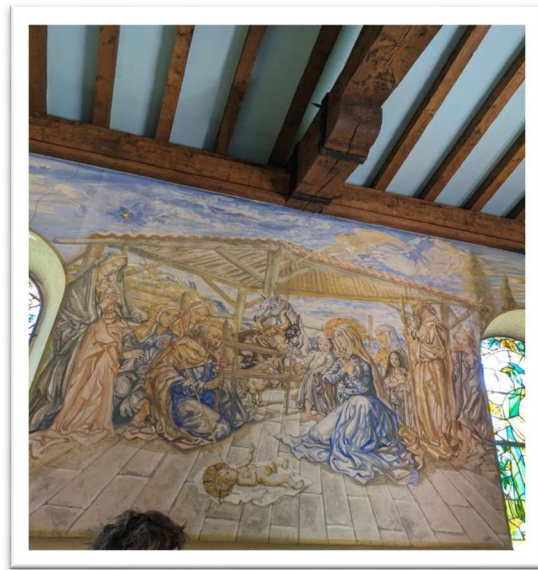


内部の壁面に余すところなくぐるりと囲むように描かれたのは、「最後の晚餐」、「キリストの誕生」、「七つの大罪」、「キリストの復活」など聖書をよりどころとした主題の数々。

どの主題もドラマティックな内容で、フレスコ独特の淡い色合いが静謐さと抑制された雰囲気



気を醸し出し、最晩年の藤田氏の静かな精神性とよく調和しているようである。

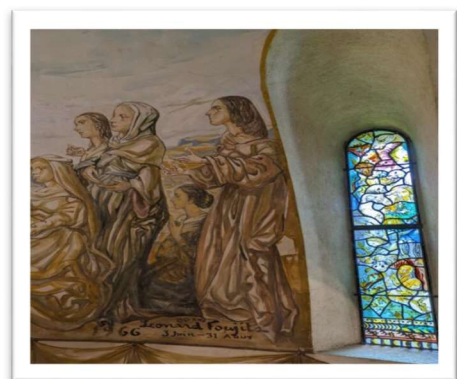


＜ランス美術館ガイド＞

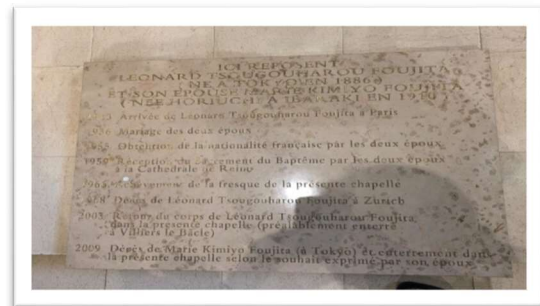
こちらが最後の晩餐です。12 人の弟子のうち、どこにユダがいるのか。ユダがキリストを金貨で売ったんです。1 人だけキリストから目をそらしている人が裏切者。金 3 貨でキリストを売った。パンを持っているわけですが。パンのモチーフというのはキリストの体を表す。その意味はキリストを大したお金ではないけど売ったということです。キリストがどこにいるか場所を教えて、キリストが捕まって十字架に架けられたのです。



控えめに光が差しこむステンドグラスがあった。これは、シャガールが携わったランス大聖堂のステンドグラスと同じ職人シャルル・マルク氏により制作された。親交があったメキシコ人画家ディエゴ・リベラ氏からの強い影響を受け制作されたといわれる戦争の惨さを訴えたものから、ガラスのつなぎ目によって象や魚、猫の姿にも見える藤田氏らしい遊びが隠されているものまで、一枚一枚見応えがある。



藤田嗣治は1968年に死去し、フジタチャペルに埋葬された。2009年に死去した君代夫人の遺骨も彼女の遺言により、このフジタチャペルに埋葬されている。



《所感・考察》

1966年10月に完成した、フジタチャペル。若い時から絵が好きで、フランスに来て自分のイメージを自ら作ってきた藤田嗣治氏。自分の魂を最後に残しておきたいと思った結晶の場。ゴシック教会のような荘厳や重厚、崇高といった言葉はどこか似つかわしくなく、素朴で親しみがあり、けれども奥深い慈悲に包まれているようなこの場所は、80歳を迎えた老齢の藤田氏が全身全霊を捧げ、藤田氏の魂が眠る「家」のような感覚を訪れる者に与える、安らぎに満ちた空間であった。



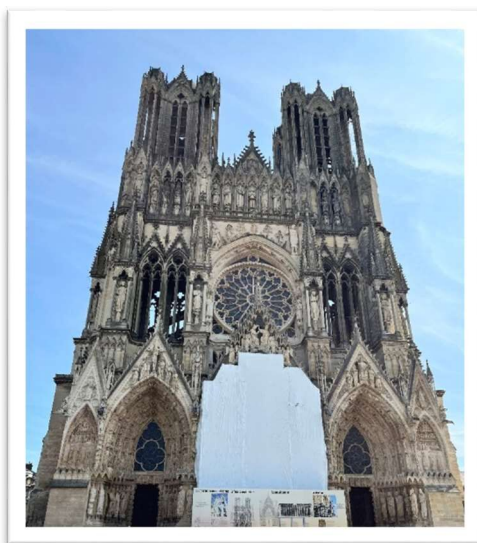


- ・フジタチャペルでの調査後、次の調査先である大聖堂へ向かった。

2 (2) 大聖堂視察

◆調査日：令和6年7月15日(月)

◆対応者：Dimitri OUDIN 氏(ランス副市長(国際化担当)) ほか



《調査目的・概要》

名古屋市とランス市は、姉妹都市提携にあたり、観光、文化、教育、経済などの幅広い交流を一層進めることにより、両市のさらなる発展を期するとともに、両国の友好関係の促進に寄与することを目的に掲げている。

ランス市は、2000年以上の歴史を誇り、498年にランス司教から洗礼を受けたクロヴィスは、ゲルマン民族諸王の中でカトリックに改宗した初めてのフランク王である。それ以来、歴代の国王がランスで戴冠式を行っており、大聖堂(ランス・ノートルダム大聖堂)は歴代のフランス国王25人の戴冠式が挙行された、ランス市にとって文化、観光の拠点として欠くことのできない重要な場所となっている。

今回、ランス市のDimitri OUDIN副市長の案内により、大聖堂の視察を行うこととした。なお、大聖堂は、パリから東北東約130kmに位置する街ランスにあるカトリックの聖堂である。隣接するトー宮殿、市内のサン・レミ聖堂とともに、1991年にユネスコ世界遺産に登録された、歴代のフランス国王の戴冠式が行われてきたゴシック様式の傑作であり、パリで活躍した画家、藤田嗣治氏の洗礼式が行われた場所としても知られている。

大聖堂については、ランス市のガイドから説明を聴取しつつ、現地調査を行った。

その概要は、以下のとおりである。

<ランス市ガイド>

13 世紀に建てられたゴシック様式の大聖堂です。2,300 もの彫刻があり、フランスで最も外観に彫刻が多い大聖堂となります。

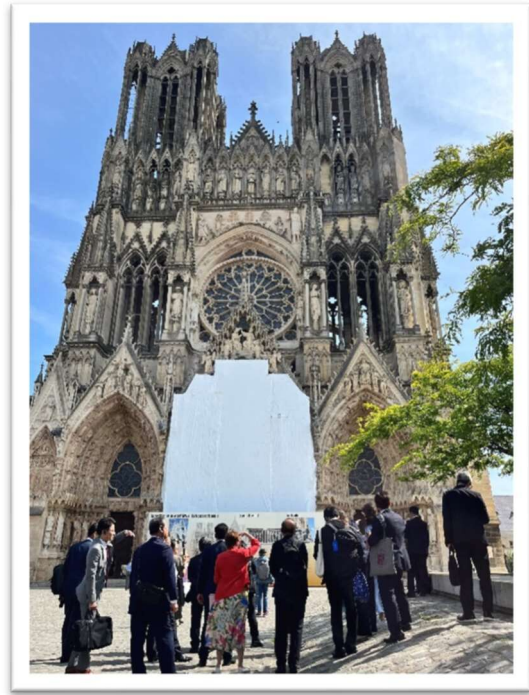
一番上にバラ窓があり、さらに上に彫刻が 7 つありますが、真ん中で手を合わせているのがフランスの歴史の中で最初にカトリックの洗礼式を受けた王となります。6 世紀の話です。それからすべての王がここで洗礼式、戴冠式を行います。藤田嗣治氏がキリスト教の洗礼式を受ける場所としてここを選んだのも、恐らくそういった歴史からだと思います。

大きな彫刻は 5 m40cm の高さとなります。手を合わせている女性の彫刻がマリアとなります。彼女の足元には丸があり、月を表しています。

左側にキリストが十字架にかかっている彫刻がありますが、第一次世界大戦の時に壊れたため、複製品となっています。右側に建物がありますが、もともと大司教のお住まいでしたが、今は博物館になっており、そこに本物が入っています。やはり外に置いたままですと、どんどん痛んでくるということで、彫刻は博物館、美術館に置いています。外にはほとんど複製品を置いておくと。

赤っぽい、ピンクっぽい色の部分がありますが、これは第一次世界大戦の火災の影響によってこのような色となっています。また、第一次世界大戦の時に首が無くなった彫像もあります。首が落ちて、戦争が終わってから修復して、中世時代のように優しくほほえむようになる。これがランスの復活を代表するようになりました。第一次世界大戦のときに 60% から 70% の町が破壊されました。大聖堂も天井が燃えて、屋根の鉛も溶けて崩れました。そこから、建て直す、修復するのに 20 年かかりました。

第二次世界大戦の時は特に問題は起きませんでした。第二次世界大戦の後、1945 年 5 月 7 日にランスで平和条約が結ばれることとなります。1962 年には、敵同士だったシャルル・ド・ゴール大統領と西ドイツの大統領がランスにお見え



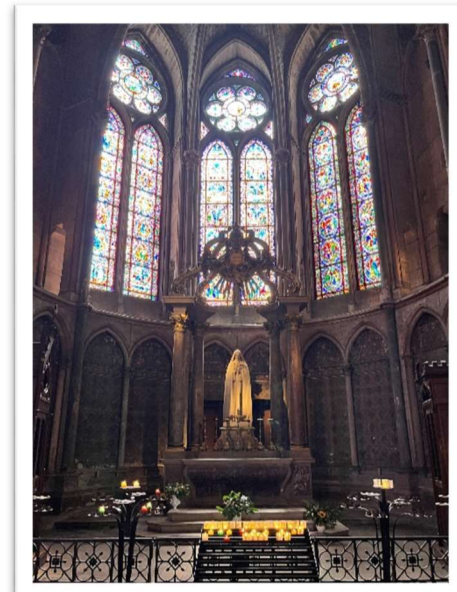
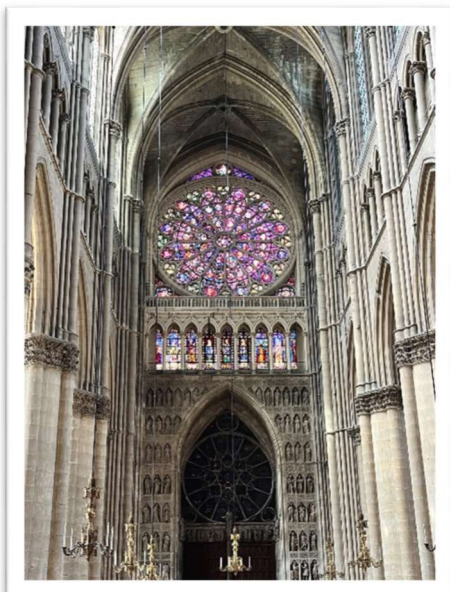
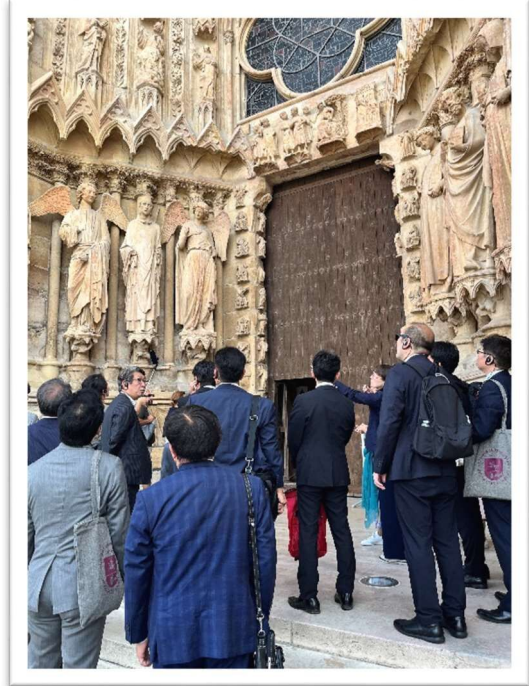
になり、再び友好関係を結びました。ユダヤ人であるシャガールのステンドグラスがこの大聖堂の中にあります。そしてドイツ人によるステンドグラスも大聖堂の中にあります。これも一つのシンボルになっています。

大聖堂の高さは 38m となります。ゴシック様式となっており、天井の重さを柱に分散するようになっています。

また、窓が多いことも特徴です。13 世紀につくられた教会ですが、当時の技術を考えると、上下に 2 つバラ窓があると強度が弱くなるのです。入口の左右に彫刻がありますが、これは世界に唯一ランスしかない特徴となっています。普通は門を通ったところの壁には何もありませんが、ここは、戴冠式を行う大聖堂であり王が来られる、よって少し変わった建築となっています。

クワイアには階段があり、王が跪いて戴冠式が行われます。25 人の王の戴冠式が行われました。1429 年にはジャンヌ・ダルクが戴冠式のためにここに来ました。17 世紀、ベルサイユ時代のルイ 14 世もここで戴冠式が行われました。戴冠式の際には特別な油を王の頭と顎に塗ります。この油をかけてもらうことにより、神が王として認めます。その特別な聖なる油は、ここしか保管していなかったため、戴冠式もここで行われるのです。

また、藤田嗣治氏と君代氏が洗礼式を受けた洗礼盤もこちらにあります。



20世紀には、様々なアーティストに依頼してステンドグラスを作ってもらようになります。ドイツ人のアーティストが作ったものや、マルクシャガールが1974年に作ったものもあります。ドイツの地方政府と個人が資金を集めて作ったものや2015年にドイツ政府がフランス政府に正式に寄贈したステンドグラスもあります。

《所感・考察》

ランスの大聖堂の天井はどこまでも高く、空間は神聖な雰囲気醸し出し、いたるところにある彫刻やステンドグラスに目が釘付けとなり、どこまでも人間を支え見守ってきた歴史と英知と神聖さに心を奪われる。ナポレオン以外の王はここで冠を授かり、藤田嗣治氏と君代夫人も信仰を授かるという、様々な深淵なる物語を綴ってきた歴史の重みを感じざるを得ない。

ランスの大聖堂の視察を通じ、歴史や文化の変遷に一喜一憂し、波乱に満ちた人生を生きてきた人々の思いや思考に深い感慨を抱くとともに、長いフランスの歴史の中で幾多の苦難に耐え忍び、崇高なる信仰に支えられながら、ランス市の人々がともに助け合い、人間の生きざまを綴ってきた高貴な姿を思い描くことができた。

